

C管も含めてすべてで6タイプそろったBSC（プラスサウンドクリエイション）のトランペットをしゃぶりつくそう、という目的で設立されたのが本クラブ。ご覧のように、ほとんど「クリソツ」（そっくり）なのに、吹き心地から音色まで、見事にそれぞれの「個性」を楽しめる、と評判だ。でも「見かけは同じなのに「音が違う」なんて、ホントなんだろうか？



C管TR-C018を手にする亀谷直也さん。洗足学園音楽大学で学んだ学生時代には師匠の曾我部清典氏が所属している「トランペット未來塾」(愛媛や和歌山など毎年各地で開催されている合宿)に通いつめ、氏直伝の「野口体操」(東京藝術大学名誉教授の野口三千三氏提唱のもの)も体得している。店頭では、楽器のほかにも、そういった基礎的な楽法や体の使い方についてそとアドバイスしてくれることもある。「まだまだ僕自身、勉強している身です。トランペットが大好きなお客様と一緒に育っていく店でありたいし、そういう自分でありたいですね」

Best Sound Club へようこそ

第1回

みんな同じで、 みんな違って、 みんないい

東京・渋谷「トランペットステーション」
亀谷直也さんとともに

そこが面白い、と言われます

BSCは、TR-105S “ミレニアム”からTR-303S “シンフォニー”まで、ばっと見たら素人には違いがまったくわからない。レシーバー部分の刻印を見るか、ヴァルヴボタンなど、ごく小さなところのわずかなつくりの違いをチェックしない限り、全部が全部「銀メッキの喇叭」というだけ。しかし、不思議なことに吹いてみるとどれも「個性的」…という、実に不思議な世界がそこにあるのだ。銀メッキだけど、実は中身がイエローブラスだったりゴールドブラスだったり…ということはまったくなくて、すべてがイエローブラス。素人にはわかりにくいボアサイズ(これ、実は外径ではなく「内径」の「太さ」のことを

指すのが通例。したがってLボアといっても外見が太くなるわけではなく、逆に管壁を薄くして内径を「太く」しているのである)も、すべてML。一緒である。BSCはご存知のように、本場ドイツで修行を重ねた日本の職人が生み出したブランド。ピストンヴァルヴを採用しているのに、ロータリーヴァルヴを用いたドイツ式トランペットの響きがする、と評判のブランドがBSCなのだ。もっとも手ごろな価格のTR-105Sから、そのほぼ倍額のTR-303Sまで、見かけはほとんど変わらない。MLボア、イエローブラスベル、ノーマルチューニングスライド…と、スペックもほぼ同一。そして、それ以外の「違い」はまったく発表されていない。公式にも、非公式にも。特長的な指かけのカバー(「フィッシュテール」)や、

ベルに貼り付けられた分厚いエンブレム、ベルの「背骨」など、マニアにはたまらないデザインの数々の理由も、明らかにされていない。「よくこれらの『理由』を聞かれるんですよ」

そうやって微笑むのは、東京・渋谷「トランペットステーション」の亀谷直也さん。中学時代からトランペット一筋の楽器生活を送り、洗足学園音楽大学では曾我部清典氏の薫陶をうけた喇叭マン。業界では珍しいサクセスだけの専門店「ウインドプロス」を成功させた池部楽器店がチャレンジした管楽器専門店第二弾「トランペットステーション」設立を機に、トランペッターから楽器ビジネスの世界に転進した。大好きなトランペットに囲まれて幸せ一杯の亀谷さんだが、単に「楽器がスキ」だけではつとまらないのもこの仕事のキツイところ。楽器図鑑的な基礎知識、マニアックなトリヴィアルには通じていて当然で、さらに楽器そのものに対する豊かな直感も必要とされるこの仕事は、生半可な「楽器マニア」では務まらない。なにしろ、ご覧のように同店には点数にして300本以上が常時スタンバイしているわけだが、これらのすべてを亀谷さんは自らチェックしているのだ。すべての楽器の正札にはワンポイントコメントが記されているが、それらのほとんどは亀谷さんはじめとするスタッフの手になるもの。しかし、よくこんなにたくさんの楽器の特長が区別できますか? 「手に持った瞬間の感じや、息を入れた瞬間の吹き心地など、第一印象が大事ですね」じ

っくり吹かなくても違いがわかる? 「じっくり吹き込んでしまうと、自分の『好み』が出てしまって、かえってわからなくなるんです(苦笑)。少なくとも、その楽器がどんな傾向の楽器なのか、ということは、慣れてくればだいたいつかめる、と思います」

そんな喇叭漬けの日々のなかで、BSCには特に注目していた、という亀谷さん。なぜ? 「やはり、ほとんど見かけが同じなのに、それぞれ個性が豊かだ、ということですね。この楽器を購入される方のほとんどがそこに興味を示され、TR-105S “ミレニアム”からTR-303S “シンフォニー”までの、すべての「同じように見える」楽器を試奏されますね」自分の予算とは関係なく、「同じようなのに『違う』っていろいろはどういうことだ?」という好奇心がおさえられなくなる、のだろう。その気持ち、楽器族ならわかりますよね。

詳細が発表されていないから、なおさら…

「みなさん、自分で吹いて確かめようとするんですね」と、亀谷さん。そして、誰もが実際に吹くと興味津々になる、という。ルックスが同じな



TR-206S (左)は他のTRシリーズとはベルのデザインが異なる…が、写真でお分かりいただけるだろうか？わずかにベルの視元が太いのである

ずり並んだBSC (東京・渋谷トランペットステーションにて)



のに、なんでこんなに値段が違うんだ！と難癖をつけるお客は皆無。「BSCはどれも共通して吹き心地がいいんです。だから、それぞれの『違い』を夢中で楽しめるんですね」亀谷さんはそれぞれの『違い』をどのように感じているのだろう。「例えば、まず感じる『違い』は、それぞれの抵抗感ですかね…それから『響き』や『立ち上がり(反応)の速さ』を感じます。それぞれを言えば、TR-105S『ミレニアム』は適度な抵抗感と響きで、始めたばかりのヒトでもこの楽器の奥の深さを感じられます。また細かく楽器をコントロールすることになれていなくても、自然にいい方向に鳴ってくれる感じです。TR-106S『ニューヨーク』はさらに抵抗感と響きが濃密になり、もっと個性的な表現が楽しめるようになります。TR-206S『オールラウンド』は、ちょっとそれら2機種とは方向性の違う響きと、レスポンスの良さが楽しめる面白いモデルですね」実はTR-206S『オールラウンド』だけはベルの設計が異なる、ということが公表されている。ベルの開きの度合いが異なるのだ(とはいえ、写真で見ても…お分かりいただけるだろうか？)「TR-303S『シンフォニー』は、こちらの表現したい方向にうまく楽器をコントロール可能な、繊細にして奥深い抵抗感とふよやかな響きが魅力です」よく見ると、オールハンドメイドなだけあって、TR-



TR-501G『WM』は、ベル部分の延べ座がないところが外見的特徴。美しいサテンゴールドも目を惹く



105Sとは細かいところの作りが微妙に異なっている。そのあたりを発見する頃には、もうほとんどの人たちがその魅力にハマっている、という。最初はTR-105Sを考えていたのが、吹いてみたら迷わずTR-303Sに方針変更した、というようなケースも珍しくないそうだ。「その上のTR-501G『WM』は、別の世界の楽器、ですね。あたたかな音色で、ジャズのコンボで吹けたらいいなあ…と、自



上がC管、下がB♭管。相似形、というところがミソ。ロータリートランペットの発想はここにも現れている

「フィッシュテール(手前)は、C管(奥)には装備されていない

然に思える音色が魅力です」アメリカ史上初の黒人大統領となったバラク・オバマ氏の就任披露パーティ(プライベートなもの)で、あのウィントン・マルサリスがこの楽器を手に数曲を披露して喝采を浴びた、というニュースは大きな話題を呼んだ。写真は決して鮮明ではないけれど、そのベル側延べ座を排除した独特の作りとベル部分のエムブレムの存在で誰もが「あっ、TR-501Gだ」と判

ったはず。「僕はクラシック出身なので、やはりB♭管ならTR-303SとC管のTR-C01S『アルマンド』がおすすめですね。オーケストラ奏者の方には特に人気が高いです」これこそ、BSCの特長である「ドイツ管」の吹き心地が体感できるモデルだ、と亀谷さんはきっぱり。「ロータリートランペットと考え方の基本が同じ、なんです。音程も音色も、クラシックのオーケで吹くには最適です。吹き比べてみれば、すぐに感じ取れるはずですよ」確かに、お店に来ればすぐに判る。だが、お店の空間と実際の合奏空間ではさまざまな物理的&心理的空間が異なる。今回は、実際にこれらのBSCモデルがさまざまな「現場」でどんな力を発揮するかを検証してみたい。(以下次号)